

類題にチャレンジ

説明的文章

平成二十八年度 埼玉県公立高校入試問題 大問3

※入試問題の文章本文は[アレスホームページ](#)よりダウンロードできます。

問4 ④過酷な環境でヒトが編み出した、生き抜くために必要な進化 とありますが、次は、筆者が考える過酷な環境を生き抜くためのヒトの進化について説明したものです。空欄にあてはまる内容を、**共同作業**、**前頭前野**の二つの言葉を使って、五十五字以上、六十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(6点)

ヒトは、二足歩行に加え、大きな脳を持つようになったが、その中でも、
五十五字～六十五字
を営むように進化した。

解説・解答例

説明的文章の読み方

まず、今回の授業でお伝えした説明的文章のポイントを再度まとめておきます。

◎説明的文章のポイント

- ① **対比関係**に注目 (例) **日本と西洋**／**昔と今** など
- ② **指示語**に注目 (例) **これ・その** など
- ③ **接続語**に注目 (例) **だから・しかし・つまり** など

ほかに気をつけて読むと理解が深まるポイントとして、次のようなものもあります。

- ④ 筆者が強調しているところ
- ⑤ 具体例 (たとえば) の前後の文
- ⑥ 問題提起の文↓答えの文
- ⑦ 定義文 (～とは)

これらのポイントを活用して、問題を解いてみます。

手がかり その① 指示語

まず、傍線部④を含む一文を確認すると、直前に「これ」という「指示語」があるのが分かります。この「指示語」が指す内容は、「やがてヒトは、ほかの動物と比べて格段に大きな脳を持つようになった。」の部分であることを確認します。ただし、この部分には今回使わなければならない「共同作業」「前頭前野」を含む一文がないので、別の箇所から「共同作業」「前頭前野」を含む一文を探す必要があります。

手がかり その② 「次の空欄」の前後

また、今回のように設問に「次の文」がある場合、その文の空欄の前後も解答の手掛かりとなります。そこで、「共同生活」「前頭前野」についての記述があり、かつ、「次の文」の空欄前後とのつながりも考慮した箇所を探すと、最後の二段落に該当する内容が見つかります。

「前頭前野」について

まず、最後から二つ目の段落から見えますと、一文目に今回の指定語句である「前頭前野」および「くとはく」や「くか」というように「問題提起の文」であり、かつ、「定義文」にもなっているのです、本文にチェックをしましょう。また、「問題提起の文」が出てきたら「答えの文」を探るのが鉄則なので、答えの文を探すと、「また」という接続語を挟んで、前後に「前頭前野」の説明が書かれていることが分かります、まずは、この箇所を解答に盛り込みましょう。これを答えの材料①とします。

前頭前野

- ・「自分を客観的に見る」感覚を司っている
 - ・自分の気持ちを参照しながら、相手が何を感じ考えているかを知るための器官
- また
- ・次に何をしなければいけないかといった物事の優先順位を決める役割

「共同作業」について

次に、最後の段落に目を移すと、指定語句である「共同作業」、そして、筆者が強調していることを表す「くのである」というキーワード、さらに、「次の文」の空欄後の「を営むように進化した」の箇所と最終段落の「を営むように…進化…」の箇所が言い換えとなっているのが分かるので、この箇所も解答に盛り込みましょう。これを答えの材料②とします。

共同作業

- ・他人の心を読んで共同作業をし社会生活を営む

「次の空欄」に合うようにまとめる

確認した材料①と②をまとめると、解答は次のようになります。

前頭前野の説明の『自分を客観的に見る』感覚を司っている」と「自分の気持ちを参照しながら、相手が何を感じ考えているかを知るための器官」は同じ内容の言いかえなので、どちらか一方を使います。今回は字数をふまえて、『自分を客観的に見る』感覚を司っている」の部分を活用して解答を作成します。

ヒトは、二足歩行に加え、大きな脳を持つようになったが、その中でも、

① 自分を客観的に見る感覚を司り、

物事の優先順位を決める機能を持つ前頭前野が特に大きくなり、

② 他人の心を読んで共同作業をし社会生活（62字）

を営むように進化した。

初めに一読した際に「筆者の主張」にチェックを入れながら読み進めていけば、「指定語句」に頼らずとも自ずと解答になる文が浮き彫りとなります。是非、この読解法をマスターしてください。

古文

◎古文読解のポイント

- ① 口語訳・注・設問がヒント
- ② 知っているのと役に立つ助詞・助動詞

助動詞		主な意味	
き(し・しか)、けり	過去(くた)	ば	助詞
つ、ぬ、たり、り	完了(くてしまった)	ども	主な意味
ず(ざり)	打消(くない)	逆接(くけれども)	順接(くので、くと)
なり	断定(くだ)		
む(ん)、べし	推量(くだろう)意志(くしよう)		

類題

次の古文の意味を、傍線部の助動詞・助詞に注意して書きなさい。点線部は口語訳です。

- ① 城じょうのむつのかみやすもり陸奥守泰盛は、さうなき馬乗りなりけり。
並ぶ者がいない
- ② あるじのいはく、これより出羽でわの国に、大山を隔てて、道さだかならざれば、道し主人るべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。
越すのがよい
- ③ 物は精心まごころに寄りて其業じごうじゆを成就なすと、人の語りぬ。
真心、仕事
- ④ 蜀の国を討たむ。
- ⑤ 家貧なれども其そ志高く、容易人もともの需めに応ずることなし。
たやすく
- ⑥ 俳諧はなくてもあるべし。
生きられる

- ⑦ ある翁おきなに、かの人はいかなる人にかとへば、いとよき人なりと答ふ。
- ⑧ 嵐あらしかければ、海鳥も姿を見せず。

解答例

- ① 城陸奥守泰盛は、並ぶ者がいないほど優れた乗馬の達人だつた。
- ② 主人が言うことには、「ここから出羽の国へは、大きな山があり、道もはっきりしないので、道案内をする人を頼んで越すのがよい」ということだ。
- ③ 物事は真心から取り組むとその仕事を成し遂げることができると、とある人が語つた。
- ④ 蜀の国を討とう。
- ⑤ 家は貧しいけれども、その志は高く、たやすく人の要求に応じることがない。
- ⑥ 俳諧はなくても生きられるだろう。
- ⑦ ある老人に、「あの人はどのような人か」と尋ねると、「たいへんいい人だ」と答える。
- ⑧ 嵐がちかいので、海鳥も姿を見せない。